発表要旨集

Abstracts

1. ラブガマ・ナーラダ（東京大学大学院修了）

シンハラ語の *Muvadev dā vata* における菩薩の概念について

中世スリランカ（11～15 世紀）は、シンハラ語による仏教文献が最も発達した時代として知られているが、従来、スリランカ仏教の研究者は、ごくわずかな例外を除き、ほとんどのシンハラ語の文献に注目しなかった。

中でも、菩薩行をテーマとする最古の詩集として知られる *Muvadev dā vata* は、文学的に高い評価を得ているとともに、スリランカ固有の「シンハラ・ブディズム」の一つの側面も描写している。その内容は、本来のニカーヤにおける『マカデーワ経』及びパーリやシンハラジャータカよりも詳細な記述である。且つ、従来のパーリ文献の中では、神聖化されていた菩薩を庶民に身近な存在として捉えているのが注目すべき点である。こうした展開は、今後のスリランカ仏教菩薩の研究おいて、重要なものとして位置づけされる。

今回の発表は、従来のパーリ文献による菩薩の研究を踏まえながら、*Muvadev dā vata* における菩薩の実態を探ることを目的とする。

2. 渡邉 要一郎（日本学術振興会特別研究員 DC（東京大学））

三蔵は恒常か？

―*Saddatthabhedacintā* 18-25 を中心として―

Saddatthabhedacintā は、Saddammasiri によって 12-14 世紀に著されたパーリ文法学文献であり、多くの哲学的主題を取り扱う。その一つとして、同書 18-25 詩節では、＜ことば＞の恒常性にまつわる議論が展開される。かかる主題は、サンスクリット文法学等で盛んに論じられてきたものであり、＜ことば＞から成るヴェーダの永遠性という問題とも関連付けられる。一般に仏教徒はこのような恒常性を認めない。ところが、Saddhammasiri は＜ことば＞は恒常であり、三蔵を「始まりがない」ものであると考える「恒常論者」の説を紹介し、これをほぼ受け入れている。本発表は、仏教文献にあっては極めて稀なこのような言語観を、主に同書古註に従って読み解くことを目的とする。

3. 山口 周子（(公財) 中村元東方研究所専任研究員）

後宮の聖女と悪女

―ウデーナ王の后たちの物語―

ブッダゴーサの著した『ダンマパダ註』に含まれる「ウデーナ王物語」最終話（「サーマーヴァティーとマーガンディヤーの死を詳らかにするウデーナ王物語」）を取り上げ、北伝仏教テキスト（『仏説優填王経』、『大宝積経』（第 29 会）、『説一切有部毘奈耶』、およびそれらのチベット語訳など）に伝わる関連話と比較する。主な着眼点は、各物語の主旨、つまり、物語を通して各経典が語ろうとするメッセージである。さらに、地域や時代、テキストの系統なども踏まえた上で、この物語が各テキストの中で与えられた「役割」を明らかにする。

4. 岡本 健資（龍谷大学政策学部准教授）

Dhammapada-Aṭṭhakathā における「三道宝階降下」について

釈尊が天界で生母マーヤーに説法を行い地上に降りたことを語る「三道宝階降下」（または「従忉利天降下」）は、帰属部派を異にすると考えられる複数の文献資料に内包されている。各々の資料に含まれる話には相違点も存在し、この話を用いて教示しようとする内容も、神通力を示すことへの非難や、仏身観に関することなど、様々である。本発表では、*Dhammapada-Aṭṭhakathā* に内包される「三道宝階降下」の記述を検討し、その他の文献資料と比較することで、相互の関係を探る。

5. 林 隆嗣（こども教育宝仙大学教授）

上座部大寺派とアバヤギリ派における頭陀（支）の解釈

―『解脱道論』の所属部派に関連して―

『清浄道論』では、頭陀支の本質を善または無記の意思とする一方で、その存在を否定する異説が批判的に紹介されている。復註は、この説について、頭陀支を概念（paññatti、仮法）とみなすアバヤギリ派の主張であると指摘している。この相違点は、教理の根幹をなす法体系にも影響することになるため、部派の特徴を示す指標の一つとみなすことができる。その意味で、『解脱道論』が頭陀支を概念（制名）に位置づけている事実は重要である。本発表では、上座部における議論の展開や解釈の変遷を追いながら、大寺派とアバヤギリ派の頭陀（支）に関する理解の違いについて考察する。

6. 井上 ウィマラ（高野山大学教授）

律蔵における看病の実践から医療者の燃えつき防止プログラム GRACE へ

律蔵の大品には、出家修行者が病気になった時にはどんな場合にも命終まで看病し合うべきことが教えられており、看病しにくい病者の 5 条件や、よき看護者の 5 条件なども記されている。そこでは、慈しみを中核に治療(cure)と世話(care)の二つの要素がバランスよく統合されている。ジョアン・ハリファックス老師によって開発された医療者の燃えつき防止プログラム GRACE は、マインドフルネスと慈悲の瞑想を医療現場で応用できるように工夫されたものである。本発表では、この両者を比較しながら仏教的実践を現代の医療現場につなげる可能性を探ってみたい。